

母親役割の主観的比重における段階的変化  
子どもの生活自立と学業達成への期待と促進行動に着目して

○花形美緒 (お茶の水女子大学)

研究の背景と目的

現代の母親たちは多くの役割を担っている。職場や家庭、そして子どもの学校などにおいても、その役割に求められることは多い。家庭において母親たちは子どもを「教育」するという役割も担うが、その家庭教育には、しつけや子どもの社会化としての家庭教育と、家庭での学習や子どもの地位達成を含んでいる(天童・多賀, 2016)。額賀・藤田(2021)は、母親の教育責任の増大を指摘し、子どもの教育と仕事の間での葛藤が生じること、それが責任感と父親の関与の少なさによることを示している。花形(2018)は、母親たちは子どもへの学習促進に加えて、子どもの学習環境の選択や手配等に関わり続けることなど学業に付随した役割も多くあること、さらに学習を促す役割と生活自立を促す役割には葛藤があることを語りから明らかにした。

これまで「教育する家庭」における母親の役割についてはペアレントクラシーとして指摘されているものの、子どもの年齢(学齢)によって学習や生活自立を促す割合はどのように変化するのか、母親はその役割の比重を自分自身でどのように捉えているのか、多くの先行研究では明らかにされておらず、葛藤や困難への対処として必要なサポートもこれまであまり取り上げられていない。そこで本研究では、子育てを通じた母親役割のうち「子どもの生活自立」と「子どもの学業」を促進する役割に着目し、その役割遂行において母親たちが自身の役割の比重をどのように変化させていくのか、子どもの学齢期ごとに段階的にどのような変化をたどるのかを示したい。「子どもに生活自立を促す」「子どもに学習を促す」という母親役割について、母親がどのような比重を理想として役割を遂行するのか、量的調査(アンケート調査)を実施して明らかにする。

調査方法と調査内容

2022年1月に同居の子どもを持つ母親を対象としたWebアンケート調査を行った。調査会社の登録モニターのうち、子どもの学齢別(未就学・小学生・中学生・高校生以上)で母親の就業割合別に抽出された800名に調査を依頼した。調査内容は、子ども数、子どもの性別、母親の就業形態などの属性項目のほか、子どもの習い事や塾、部活動などの時間、子どもの家事実践、母親が期待する子どもの最終学歴、母親から子どもへの生活自立促進行動や学習への働きかけ、母親の期待する子どもの生活自立と学習の割合などである。分析には、SPSS Statistics28、Amos28を使用する。

主な分析結果と考察

子どもに自分の身の回りのことは自分でしてほしいと考える母親は多く、子どもの生活自立への期待や促進行動が多いものの、子どもの学業達成のための働きかけは子どもの学齢によって変化がみられ、母親役割の主観的比重が段階的に変化することが明らかになった。しかしながら子どもの学業達成への期待や母親の希望によっても働きかけは異なることや、子どもの学齢によって求める到達が異なることも示された。分析に使用した変数の詳細や記述統計、パス解析結果は当日報告する。

本研究は、2021～2022年度科学研究費基盤研究(若手研究)「母親役割の段階的移行において必要とされる資源的サポート」(課題番号21K13415 研究代表者 花形美緒)の研究の一部である。

キーワード：母親役割移行、子どもの生活自立促進、子どもの学業促進